

鹿北中学校経営方針

1 はじめに

何のために毎日学校に勤務しているのか、教師だから、給料をもらっているから、もっと青臭く「教育に夢とロマンを求めて・・・」。かつて松下幸之助は、「なぜ会社は存在するのか」「我々は何のために働くのか」という原理・原則に愚直なまでにこだわったという。年度初めに、まず、このようなことを考え、共有するところから始めていきたい。いわゆる「ベクトルをそろえる」ということ。進むべき方向性を合わせることで、力の集中が起き、より高いエネルギーを生むことができる。そのエネルギーを鹿北の教育に向けることで、生徒の成長を、可能性を最大限引き出すことができると考える。

- 日本の教育はいったいどこへ向かっているのか？
→ ・**学習指導要領**
- 鹿北中学校はどこへ向かおうとしているのか？
→ ・**鹿北中の教育実践** ・**学校教育目標** ・**生徒会年間テーマ**
- 私はこれから鹿北中で何をしようとしているのか
→ ・**校務分掌** ・**役職** ・**ベテラン 中堅 若手**・・・
- 私は何のために鹿北中に配置されたのか？
→ ・**自分の長所 自分の強み**

2 学習指導要領が示す方向性の共有

(1) 社会に開かれた教育課程の実現

- ① 社会や世界の状況を把握し、それらを踏まえて目標を設定し、その目標を社会と共有することができる教育課程を編成する。
- ② 人生を切り拓くために求められる**資質・能力**を教育課程の中に落とし込む。
- ③ 学校教育目標や実践を学校内に閉じ込めず、その目指すところを社会と共有・連携し実現していく。

(2) 育成を目指す3つの**資質・能力** ～何ができるようになるのか～

学習指導要領では、教育活動全般を通して育成すべき資質・能力を次の3つに整理している。

- ① 何を理解しているか、何ができるか
→ 生きて働く「**知識・技能**」の習得
- ② 理解していること・できていることをどう使うか
→ 未知の状況にも対応できる「**思考力・判断力・表現力等**」の育成
- ③ どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
→ 学びを人生や社会に生かそうとする「**学びに向かう力・人間性等**」の涵養

各教科等の目標や内容についても、この3つの柱に基づく再整理を図るように提案がなされた。つまり、すべての教科等の目標及び内容を、「**知識及び技能**」、「**思考力、判断力、表現力等**」、「**学びに向かう力、人間性等**」の3つの柱で再整理した。

知識や技能は、思考・判断・表現を通じて習得されたり、その過程で活用されるものであり、また、社会との関わりや人生の見通しの基盤ともなる。このように、資質・能力の3つの柱は、相互に関係し合いながら育成されるものであり、資質・能力の育成は知識の質や量に支えられていることに留意する必要がある。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」に視点からの授業改善

① 主体的な学び

→ 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持ってねばり強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる。

② 対話的な学び

→ 生徒同士の協働、教職員や地域の方との対話、先哲の考え方を手がかりに考えること等を通して、自己の考えを広げ深める。

③ 深い学び

→ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けて、より深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりする。

(4) カリキュラム・マネジメント

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、**教科横断的な視点**で、目標達成に必要な教育内容を組織的に配列する。
- ② 生徒の姿、地域の実態を調査し、各種データに基づき教育課程を編成し、P D C Aサイクルを確立する。
- ③ 必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用し組み合わせる。

教科横断的な視点に立った資質・能力とは

・ 学習の基盤となる資質・能力

生徒の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成できるよう、教科横断的な視点から教育課程の編成を図る。

・ 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて、次世代の社会形成や現代の諸課題に対応するために求められる資質・能力を育成できるよう、教科横断的な視点から教育過程の編成を図る。

(5) 具体的な教育内容（各教科等）の改善・充実 ～何を学ぶのか～

- ① 小学校では、外国語活動の時間が大きく増えた。外国語活動と中学校の英語活動の接続をどのように行うかなどを考えていく。
- ② AIが進化する中で、学校教育において、人間の強みを引き出す教育が一層必要となる。

(6) 学習評価の充実 ～何が身についたか～

- ① 観点別評価は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点である。
- ② 毎回の授業ですべての観点を見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てていくことが大切。
- ③ 主体的に学習に取り組む態度は、学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方などで評価するものではない。生徒が自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して、新たな学習につなげるといった学習を工夫しながら、ねばり強く知識・技能を獲得したり、思考・表現・判断しようとしているかといった側面で評価する。

3 昨年度の実践【成果と課題】

(1) 話し合い活動の充実

昨年度、特に力を入れてきたことは、鹿北小・中学校すべての学級での「話し合い活動」の実践とスキルアップである。研究授業を定期的に実施し、その都度、成果と課題を確認し、次の実践につなげることができた。課題としては、それぞれの学級や教科での話し合い活動の工夫と学びを、他の学びの場面であまり生かすことができなかつたことである。この点で、まだまだ、本当の力が身につけているとは言えない。

(2) 制度上の「6・3制」から運用上の「4・3・2制」への転換

鹿北小・中学校は山鹿市「小中一貫教育モデル校」の指定を受け、9年間の学びの再構築に取り組んできた。何度も協議と実践を重ね、鹿北ならではの教育の形を模索してきた。その結果として、「6・3制」から「4・3・2制」への移行を行い、次のような教育の形を創りあげた。

I期（小1～小4）・・・基本的な生活習慣・学習習慣、社会性、集団生活のルール等、基礎基本を身に着ける。

II期（小5～中1）・・・獲得した基礎基本を生かした自治的活動に取り組み、資質・能力の育成を図る。民主的集団づくり。

III期（中2・中3）・・・学校内で行ってきた自治的活動を地域へと広げ、資質・能力や社会人基礎力を磨く。

しかし、まだまだ教職員、児童生徒、保護者、地域の方々と共有した鹿北の教育にまで至っていない。今後は、実践をさらに進め、意義を理解してもらうためにどのような活動をおこなうのかについても考える必要がある。

(3)「4・3・2制」を意識した実践

Ⅱ期の活動を充実させるために、鹿北小児童会と鹿北中生徒会の連携強化を図ってきた。その1つの取組として、昨年2学期、鹿北中の委員会活動を再編し、小学校の委員会活動と連携できる体制をつくった。さらに、冬休みには、初めて小中合同のリーダー研修会を実施した。その中で、今年度の児童会・生徒会共通の年間テーマを決めることができた。

今後は、目的を明確にした計画的な取組へとつなげていくために、具体的にどの場面で連携ができるのかを考えていくこととなる。まずは、5月に行われる小中合同大運動会への児童生徒の参画について早急に計画立案を行っていく。

(4) 期集会の実施

昨年度、年4回の期集会を実施した。それぞれの期集会では、事前の取組から当日、事後の反省までを1つの流れとして取り組むことができた。各期の発達段階に応じて特色ある取組を考えることができた。今後は、Ⅰ期からⅡ期、Ⅱ期からⅢ期への移行学年での修了式などを効果的に行い、児童・生徒が「4・3・2制」の意義を理解できるよう意識付けを行っていく。

(5) 地域学校協働活動

毎年、ナイトハイク、かほくまつり、町駅伝大会への参加を通して地域の方々との交流を図ってきた。特に、かほくまつりでは、企画段階からかほくまつりサポーターとして参加させていただき、昨年のかほくまつりでは、10年ぶりの神輿の復活とゆ〜かむさんの協力を得て、鹿北の特産物を使ったスイーツ開発（茶っぷりん）に取り組んだ。生徒は、取組を通して、1つのプロジェクトを成功させるために、地域の方々とお客さんとしではなく、地域づくりのパートナーとしての関係を築くことができた。また、本気でやり遂げた時に感じるができる、達成感、充実感を味わうことができた。

今年度は、どのような取組をおこなっていくのか、3年生を中心に考えていくこととなるが、そのための時間を捻出する工夫が求められる。

また、吹奏楽部が夏休みを中心に行ってきたサロン会ツアーを、部員不足が懸念される中、今年度どのように実施していくのかを考える必要がある。

(6) 小中合同体力作り

鹿北小学校の部活動が社会体育へ移行して3年目を迎える。体力や耐性の低下が心配される中、小中学校合同体力作り、小学6年生の部活動への参加などに取り組んできた。しかし、社会体育に参加しない児童は、なかまと共に継続して目標に向かって努力する経験を積むことなく中学校に入学してくる。このような状況を回避するために、保小中及び地域と連携した鹿北の運動環境整備を行っていくことが大切となる。

(7) 授業力向上プロジェクト

昨年度後半より、UDの授業力向上のため、鹿北版UD化チェックリストを活用し、鹿北版学習過程スタンダードの実践を通じた授業力向上に取り組んできた。研究授業の時に集中してエネルギーを使うような研究から、日々の授業において課題と具体的実践を明確にした授業改善に取り組み、視点を明確にした無理のない検証授業を行うという形での研究授業へと質的な転換を図ってきた。

この取組を今年度さらに徹底し実践していくことで、一人一人の授業力を高めていきたい。

(8) 個に応じた家庭学習習慣の確立

家庭学習については、生徒、保護者、教職員の学校評価において、大きな課題意識があり、その課題が1年間解消されていないという状況にあり、本校の最重要課題として位置づけられる。昨年度、中学2年生を抽出学年として、家庭学習のあり方を試行錯誤しながら模索してきた。しかし、思うような成果を出すことができなかった。年度末の職員会議でも有効な手立てを示すことができず、私たちに突きつけられた課題となっている。

今年度、具体的に家庭学習習慣が定着していない生徒を洗い出し、教育相談を実施し現状把握を行い、計画的、継続的に家庭学習支援を行っていくなどの取組を考えていく必要がある

(9) 思いを伝え合えるなかまづくり

近年、生徒会では、年間テーマを設定し、そのテーマに沿った取組を考えチャレンジしていくという、鹿北中学校の新たな生徒会の形を創り上げ、その実践が定着してきている。このことで、生徒の顕著な成長が見られ、大きな成果が得られている。この年間テーマを決める際に、重点実践事項を決めていくが、その中には、3年連続して同じような内容が見られる。それが、「思いを伝え合えるなかまづくり」である。つまり毎年、生徒は同じような課題意識を持ちながら生活しているということになる。この課題意識を、私たち教職員も共有し、本当の意味でのなかまづくりに取り組んでいきたい。

以上、昨年度の主な実践における成果と課題について振り返ることで、今年度の具体的実践について考える資料としたい。

4 鹿北中学校の教育の方向性

(1) インクルーシブ教育システム構築

鹿北中学校の教育基盤であるインクルーシブ教育システムをさらに構築していく。そのための基礎的環境整備や適切な合理的配慮を行い、障がいの有無に関わらず誰もが教育に参加できる、誰もが社会的自立に向けて学べる、これが鹿北中学校の教育基盤である。すべての生徒の能力や可能性を最大限に伸ばし、社会的自立や社会参加ができるように、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援の充実に努めていく。

(2) 縦の連携（保小中連携）と横の連携（地域学校協働活動）による教育

鹿北中学校の生徒は、小学校入学から中学校卒業までの9年間、クラス替えがない少人数の固定した人間関係の中で生活している。そのことでの強みを生かしながらも、弱みの克服に努めなければならない。鹿北の教育環境の強みである小中学校が併設していることや、保育園が小中学校のすぐそばに開園されたことを生かして、保小中の連携を強化した一貫教育を目指すことで、多様な学びを生み出していく。

また、地域学校協働活動を推進し、地域の方々から伝統文化や伝統産業を学ぶ学習を通して、多様な生き方や考え方に触れる機会を増やしていく。さらに、町の行事に企画段階から参加させていただくことで、地域の方々と地域づくりのパートナーとしての関係

をつくっていく。

以上のように、連携を通して、中学校という少人数の人間関係から抜け出し、年齢、男女を問わず様々な生き方や考え方とをもった人たちとの交流による「**多様な学び**」を創造していく。地域交流を通して「**社会の接点での学び**」を充実させることで、学習指導要領に示された3つの資質・能力の育成、社会人基礎力の育成を図っていく。

5 学校教育目標達成のための具体的実践事項 ～3つの基礎基本の獲得～

(1) 人としての基礎基本

- ① なかまづくりを推進し、思いを伝え合える集団づくりを行う。
- ② 話し合い活動推進によるコミュニケーション力育成と民主的集団作りを行う。
- ③ 生徒会活動推進によるリーダー育成と集団の質の向上に取り組む。
- ④ 生徒の学校行事・地域行事参画により、社会で求められる資質・能力を育成する。

(2) 学力の基礎基本

- ① UDの授業力向上による基礎基本の確実な定着を図る。
- ② 個別支援の充実による学習意欲喚起と自尊感情涵養を図る。
- ③ 個に応じた家庭学習習慣を確立する。
- ④ 理数教科の指導法工夫改善により苦手意識を克服する。

(3) 体力・耐性の基礎基本

- ① 鹿北の運動環境整備による各発達段階における体力向上と耐性強化を図る。
- ② 社会体育と部活動の連携による体力向上と耐性強化を図る。
- ③ 小学校と連携した体力向上活動を推進する。
- ④ 小学生の部活動参加による体力向上と耐性強化を図る。

6 鹿北中学校の存在意義

鹿北小・中学校は、単学級の小規模校で、現在、児童・生徒指導上の問題もほとんどなく、保護者・地域の方々との関係も良好であり、中学校は教科の授業時数もそれほど多くなく、各学級の児童・生徒数も少ない学校である。

だからこそ、一人一人が、自分の強みを生かしたと取組を行うことができる。自分で自分自身を向上させる取組ができる。児童・生徒との徹底した関わりの中から、自分にしかできない「学び」を創ることができる。

そんな鹿北小・中学校にも忙しさはある。しかし、他の学校のいそがしさとは少し性質が違う。鹿北中学校のいそがしさやきつさは、他の学校よりも「日常の教職員の仕事のいそがしさ」が比較的少ない分、より一層、何かを生み出すことに、スピード感や創造力を発揮してチャレンジしていかなければならない、そんないそがしさがある。

また、地域とのつながりが強い地域なので、土・日に行われる地域行事への積極的参加が求められる時がある。

今年度、鹿北小・中学校は、保育園や地域を巻き込んで、教職員一人一人の強みを生

かした発想豊かな研究実践に取り組んでいく。そこに他校にない鹿北中ならではの存在意義がある。

このことを自覚して、どのように生徒や地域との関わりを創っていくのか、生徒の自立のために何を行うのかを一人一人が考えていくことが求められる。

7 一人の人として魅力ある大人に

昨年同様、「事件は会議室で起きてるんじゃない！現場で起きてるんだ」との言葉を自分自身にもあてはめ、職員室にいるよりも生徒のもとへ行く教職員でありたい。

部活動指導には始まりから終わりまで、どちらかが必ずついて指導する、フルタイムの指導が大切である。そのための二人体制である。

感性を豊かにし、生徒のちょっとした変化に気づく教職員でありたい。そのために働き方改革に取り組み、人としての幅を広げる時間を創り出すことが大切である。このことはめぐりめぐって教育の充実につながっていく。

また、日々、自分のすぐ横を声をかけてほしい生徒が通り過ぎている。それを見逃さない教職員でありたい。

私たちの教育の成果は、目の前の生徒の姿がすべてである。けっして言い訳をせず、生徒の成長に責任が持てる教職員でありたい。何よりも生徒があこがれる魅力ある生き方ができる一人一人でありたい。

私たちの言語環境を整えていくことは何より大切である。次の言葉を大切に教育実践に取り組んでいく。

「木は光を浴びて育つ。人は言葉を浴びて育つ」